香取遺産

◀尾崎一雄碑（小野川河口付近）

vol.191 水郷を訪れた文人たち
—大正から昭和にかけて—

大正から昭和にかけて鉄道や橋、観光船が次第に整備され、水郷観光は大いに盛り上がりました。文人たちも風光明媚な水郷を楽しむだけではなく、町の様子や風習にも関心が向けられていきます。田山花袋は「水郷めぐり」の中で「真菰と真菰の繁り合っている中に漂って、ひとりさびしそうに波に動いているのなどもあった。さて、しかし、容易に沈まないと言っても、どうせ真菰で編んだ舟である。波に逢っては、覆没し、水が浸み込んで来ては、忽ち沈んでしまうのは、やむを得ないことである。この小さき舟の沈む間の人生　実際、人生はそうした儚ないものであるように私には思われた。」と盆舟について書いています。また若山牧水「水郷めぐり」では、大正8年3月に建立されたばかりの伊能忠敬銅像を訪れています。

昭和になると、水原秋桜子が十二橋で俳句「濯ぎ場に紫陽花うつり十二橋」を詠み、昭和15年尾崎一雄は「水郷めぐり」に小野川河口の宿屋にて「十五夜の月が満々たる水の向こうに浮び上った眺めは今だに眼に残っている。盆のような月と云うがそれが静かにのぼってくる。空にはりついたような静かさだ。利根の流れに長くゆれ光る投影。あんな月を、あんなにゆっくりと眺めたことは珍らしい。」と書きました。

戦後は、実際に居住していた文人の作品に、水郷が登場します。昭和23年市内の高校に勤務した小島信夫の「鬼」、昭和28年佐原地域の病院に療養していた吉行淳之介の「水の畔り」などがあります。

今では、当時の水郷の景色を見ることはできませんが、東京近辺にはない風景で非日常的な空間を体験して、大いに創作意欲がかき立てられたものと思います。

問 生涯学習課 ☎(50)1224